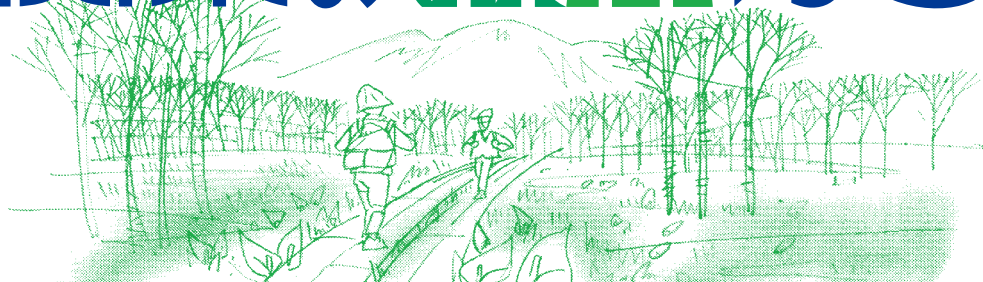


平成21年1月1日

第58号

関東の森林から



国民の森林・国有林

関東森林管理局

前橋市岩神町4-16-25

TEL (027)210-1158

FAX (027)210-1159

<http://www.kanto.kokuyurin.go.jp/>



富士山

(山梨県山梨市三富より)

(撮影：山梨森林管理事務所 輿石秀明)

年頭所感

「国有林の三つの使命」

関東森林管理局長 小林 裕 幸

私の視点

「今日自然保護は皆の共通責務」

岩船地方山岳遭難対策協議会 副会長 横山 征平氏



広報「関東の森林から」は、日本の森林を育てるため間伐材を使用しています。

年頭所感

国有林の三つの使命

関東森林管理局長 小林 裕 幸



新年、明けましておめでとうございます。

私も関東森林管理局は、北は新潟県・福島県、南は静岡県・東京都（小笠原）までの一都十県の国有林119万鈔を管理しております。国民からお預かりしたこの広大な森林をしっかりと管理できるよう全力を尽くしますので、本年もどうぞよろしくお願ひします。

私は、国有林に与えられた使命は大別して三つあると考えております。

第一は、30年後、50年後の人々から「良い山を残してくれた」と言われるような「将来に向けた森林づくり」です。

森林、特に人工林は、間伐などの人手による整備が必要ですが、残念ながら管内には整備が遅れた森林がまだまだあります。当面の最も重要な課題として、これらの森林の整備に力を注ぎたいと思います。

また、豊かな自然を守り、あるいは傷んだ自然を回復させることも我々の重要な仕事です。新潟県佐渡島におけるトキの定着しやすい森づくり、群馬県赤谷地区における生物多様性の復元に向けた取り組み、小笠原諸島における外来植物の駆除などがその例です。

次に、木材の生産や国民による森林の利用など「現在の国民に対する資源・サービスの提供」です。木材については、住宅様式や海外諸国の木材需給構造の変化、国内の木材加工体制の充実などによって市場ニーズが変化しておりますが、こうした変化に対応して国産の木材を安定的に供給し、そのことによって地域の活性化にも役立ちたいと思います。

また、多くの人々が森林に親しめるような環境整備も進めていきたいと思ひます。さらに、災害復旧事業や治山事業などを通じて、将来の森林づくりと併せて地域の方々に安心して暮らしていただく環境作りをすることも我々の大切な任務であります。

三番目が、これらの使命をできるだけ低コストで効率的に実施し、税金の投入という形で国民の負担を抑えるよう国有林を経営することです。国有林は、現在、特別会計の仕組みで運営しておりますが、実は、収入（借換借入金を除く）の8割近くは一般会計（税金など）から繰り入れられています。

今後、国有林の効率的かつ安定的な管理経営を行うため、①一部の業務を独立行政法人に移管した上で、②現在の特別会計を一般会計に統合する。という方向で幅広い検討が行われています。この新たな改革の内容の詳細は、今後示されることになると思ひますが、いずれにしても、我々としては、与えられた枠組みの中で、コスト意識をしっかりと、国有林の経営をしていかなければなりません。

また、こうした流れの中で、業務の発注に際しては、公平性、透明性、品質確保の観点から、一般競争入札、とりわけ総合評価方式を拡充するな

どの改善を進めてきています。事業者の事務的な負担が増えている場合もあるかと思ひますが、御理解いただければありがたいと思ひます。

本年の経済情勢については、米国を震源地とする金融危機が世界経済に大きな打撃を与え、我が国経済についても悲観的な見方が主流となっているなど不透明な状況です。

また経済以外の分野でも予測しづらい情勢変化も色々とあるかもしれませんが、私たちがとしては、精一杯、与えられた使命を果たすべく努力いたしますので、関係者の皆様方のアドバイスと御支援を頂ければ有り難いと思ひます。



赤谷プロジェクト近況報告

「環境教育・関東ミーティング 2008 AKAYA」の開催



挨拶をする小林局長

冒頭に実行委員会委員長の（財）日本自然保護協会・横山常勤理事と関東森林管理局長の挨拶があり、NPO法人日本エコツーリズム協会理事で「観光カリスマ」の山田桂一郎氏からエコツーリズムの目的や進め方などについて刺激的な講演が行われました。

その後、藤江計画部長、（株）八ヶ岳高原ロッジ取締役営業企画部長の高品武志氏、NPO法人ねおす専務理事の宮本英樹氏の三氏がそれぞれ話題提供を行い、環境教育関係者やエコツーリズムをテーマとして、その地域の環境をどのようにマネージメントするのか、関係者間の連携・調整・合意形成の難しさなどについて話し合いが行なわれました。

二日目には六つの分科会が開催され、赤谷センターが企画した分科会「里山の森における環境教育～行政の役割を探る～」では、松本指導普及課長、京都大学大学院深町准教授、及び（独）森林総合研究所多摩森林科学園大石グループ長によりテーマに沿った話題提供とディスカッションが行われました。

その中で、「地域の住民が意外と身の回りの里山の歴史や森林について関心が低く、環境教育が果たす役割は大きい。」「環境教育に携わる関係者間の地域ネットワークの形成を支援していくことに行政の果たす役割があるのではないか。」また、「環境教育に携わる各主体がそれぞれ役割分担と目標を明確にして環境教育に取り組んでいくべき。」など、活発な意見交換がありました。



3日間を振り返って、グループ討議

11月28日（金）から30日（日）にかけて、「多様な自然の気づき方、伝え方、エコツーリズムへのつなげ方」をテーマに「環境教育・関東ミーティング2008 AKAYA」を同実行委員会が主催、（財）日本自然保護協会、関東森林管理局及び（社）日本環境教育フォーラムが共催、環境省、群馬県、みなかみ町等が後援、赤谷プロジェクト等が協力して開催し、130名を超える環境教育関係者が参集しました。

この環境教育関東ミーティングは、関東周辺で環境教育活動に取り組む関係者が環境教育に関する情報共有・研修・交流する機会として、平成16年度から開催され、今年で5年目となります。

冒頭に実行委員会



全体会での熱心な質疑応答



自由発表の様子

その他、関東森林管理局・赤谷センターの企画で「森林教室～これからの営業・推進ポイント」、「いきもの村」に棲むムササビの観察記録、「いきもの村」を例にしたボランティアセンターの作り方・難しさ、「美しい森林づくり推進国民運動」などの自由発表やオプションプログラム、パネル展示を行いました。

今回のミーティングにおいて、関東圏で活動する環境教育に取り組んでいる幅広い関係者が交流を深め、その経験や知見について学ぶことができ、参加者から今後自らの活動に反映していきたいとの大きな反響がありました。これらの成果は、赤谷プロジェクトの環境教育の取組の中でも活かしていきたいと考えております。

各署便り

「森林(もり)からのおくりものフェア二〇〇八」開催

【会津署】 10月19日(日)、多くの市民に森林管理署の果たす役割を知ってもらうことを目的として、「森林(もり)からのおくりものフェア二〇〇八」を開催しました。



「早く始めないかな」

当日は、さわやかな秋晴れに恵まれ、開門と同時に庁舎駐車場の丸太切り、焼印、木工工作、薪割り体験等の各コーナーとも賑わいを見せ、特に女性に人気の蔓細工コーナーは、作業スペースが足りないくらいに混雑ぶりで、自慢の一品を短時間で仕上げる強者から夫婦で悪戦苦闘しな

から、閉門時間ギリギリまで頑張った人々もいました。

庁舎内では、子供達にも人気の押し葉しおり作りや森林整備の状況、国有林に自生する花の写真パネルの展示を行いました。

職員手作りのキノコ汁を味わいながら、一日中遊ぶ家族連れなど三百名近い来場者で終日賑わいました。

80枚を超えるアンケートによると、森林管理署の役割が理解できたとするポイントが昨年よりも十ポイント以上も増えていました。

また、国有林に対する励ましの言葉も書き添えられました。

(広報連絡官 内山正彦)

地元市町村有志協議会を現場で開催

【百河支署】 10月10日(金)、当支署では、「平成20年度国有林野等所在市町村長有志協議会」を開催し、各市町村長・県と意見・情報交換を行いました。

今回は、9月に完成したばかりの「竜生奥地保安林保全緊急対策治山工事」箇所視察も兼ねて現場で開催しました。

各委員からは、間伐材を多く使用し自然にやさしい施設であり、今後にも更に推進してほしいとの要望等がありました。



間伐材を多用した治山工事箇所の視察

その後、百河支署の概要や取組状況について説明し、意見・情報交換会に入りました。

意見交換では、「間伐の推進について」に話題が集中し、森林吸収源対策における森林整備、特に間伐の推進は重要な課題であることから、国・県・市町村の協力が重要であり、今後とも関係機関の協力・連携を更に深めて行くこととしました。

(広報連絡官 阿久津文彦)

「むかし道」(旧電車道)の森林整備を実施!

【吾妻署】 昭和37年まで草津軽井沢間を運行していた草軽電鉄の跡地は、「むかし道」として多くの人達が散策コースとして楽しんでいきます。しか



整備された「むかし道」

散策している人は、明るくなった様子を見て、「これで安心して散策ができる。」と喜んでいました。

(広報連絡官 関上辰弥)

しながら近年、手入れ不足となっていたため、道は荒れてきており、周辺の木々も繁茂し、薄暗くなっていました。

今回、前橋国有林森林整備協会(高山光男会長)からボランティア活動を実施したいと申し出があり、「むかし道」の整備を行うことになりました。

11月17日(月)、草津町の各団体の皆さんにも参加をいただき、総勢50名を超える参加者を得て、約3.5^キの「むかし道」を、笹刈班、被さっている木々等の伐採班、伐採した枝条の片付け班、道を整備する班に分かれて作業を行いました。

国有林現地見学会を 開催!

天竜署 11月13日(木)、紅葉も最後の彩を魅せる浜松市天竜区水窪町の地頭方面国有林において、天竜流域林業活性化センター並びに浜松市の協力を得て、分収育林オーナー・国有林モニタリングなど約30名の参加の下、恒例の「国有林現地見学会」を開催しました。

見学会は、国有林野事業を理解していただくことが目的であり、まず、間伐の実行済み箇所立ち寄り、間伐の目的や選木の考え方を説明しました。

その後、次の目的地まで移動し、まだ暖かさを感じさせる陽だまりの中、鮮やかな紅葉を満喫しながら、



間伐の説明を聞く参加者

暖かい水窪茶とともに弁当を楽しみました。

午後からは、熊による皮剥ぎ被害の実態を見学し、引き続き、治山事業による山腹工と谷止ダムの補修現場に移動し、それぞれの目的や治山事業の重要性などを説明しました。それぞれの現場では、参加者の皆さんから多くの質問が出るなど、有意義な一日となりました。

(広報連絡官 藤原寿昭)

新潟地区国有林野等 所在市町村協議会総会 を開催

下越署 11月19日(水)、平成20年度新潟地区国有林野等所在市町村協議会総会を開催しました。

今年度は、上越森林管理署管内の糸魚川市において、国有林野情勢・国有林野における地域経済の振興及び諸対策について話し合われました。

また、本年は「美しい森林づくり推進国民運動」による民国連携による間伐等森林整備の促進、国有林の地域貢献に対する国民理解の浸透等を図るため、積極的な取組を行っています。

このため、今回は林野庁から造林間伐対策室長が出席し、「間伐等の推進による森林整備の取組状況について」の説明をしました。

各委員からは地域における間伐推進の問題点等多くの意見が出され意義深い内容となりました。

来年度は、新潟米(コシヒカリ)のメツカ、中越森林管理署管内で開催する予定となっています。

(流域管理調整官 富樫仁榮)



20市町村が所在市町村協議会の会員となっている

地元と協力して クリーン活動

云津署 9月25日(木)、南会津町の国号121号沿いの旧山王道付近の国有林でクリーン活動を実施し不法投棄されたごみを撤去しました。

当日は、南会津町役場をはじめ南会津地方振興局、南会津建設事務所及び地元区長会ボランティアの方々等約30名が参加して作業を行い、2

トントラック3台分のゴミを回収しました。

ゴミの中には、テレビや大型車のタイヤ等もあり、参加者は斜面からロープを使って引き上げ作業に汗を流していました。

参加者からは、「地域をきれいにするための活動には今後も協力したいが、ゴミを捨てる人がいなくなればこのような活動をしなくてもいいのに。」という声が聞かれました。

(管理係 菊池文也)



クリーン活動により集められたゴミの山





国際森林研究機関連合のメンバーの皆さん

国際森林研究機関連合が ブナ天然更新箇所を視察

中越署 10月30日(木)、越後山脈の山並みが初冠雪と紅葉で、鮮やかなコントラストに映える苗場山国有林のブナ天然更新試験地に、IUFRO(国際森林研究機関連合)の第6回異齢林研究会が開催され、アメリカをはじめ海外から多くの研究者が訪れました。

視察に先立ち、中越森林管理署長が歓迎の挨拶と現地の説明を行い、その後、試験地でブナの天然更新状況を視察しました。

視察では天然更新の難しさや、ササという東アジア独特の植生が、森林管理に与える影響に強い関心を

持ったようで、熱心な討議が展開されました。

また、この研究会と直接関係はありませんが、女性森林官が腰に下げた鉈や熊よけの鈴に関心を示した研究者が、記念写真を撮っている姿も見られました。

後日、主催者から視察の成功と、貴重なブナ天然更新試験地の維持管理に感謝の言葉が寄せられました。
(流域管理調整官 會澤 明)

下越森林管理署 新庁舎 県産材使用見学会を開催

下越署 11月28日(金)、当署新庁舎において県産材使用見学会を開催しました。

この新庁舎は、平成20年9月から建築が始まり、使用した木材は、庁舎全体で112.2立方メートルとなっています。その内の、107.7立方メートル(96%)を県産の「越後スギ」が占めており、人と環境に優しい循環型資源である木材、特に、「越後スギ」の利用推進を図ることを目的として下越流域森林・林業活性化センターと連携し見学会を実施しました。

当日は、木材関係団体等約80名が参加し、下越森林管理署長の挨拶の後、設計を行った梶建築設計事務所から建築概要の説明を受け、構造材の見学を行いました。



雨の中での見学会となりました

見学会には新潟市役所から20数名の参加もあり、公共建築や地球温暖化対策に木材が大いに期待されているとのことでした。

また、本庁舎は「あやめのお城」として有名な新発田城のお堀の端部、新発田市景観区域内に位置するため、地域に根ざした施設として周囲の歴史的風景に調和するように城下町の町並みの特徴を取り入れた作りとなっており、完成時には白壁調の純和風の庁舎になる予定です。
(流域管理調整官 富樫仁栄)

枝落とし作業に奮闘!

宇竜署 爽やかな秋晴れの下、去る11月18日、瀬尻国有林にて浜松東年金受給者協会から総勢70名の森林ボランティアを受け入れ、枝落とし作

業を行いました。

開会にあたり、署長から「活動に対する御礼と元気な森林づくりに取り組もう」との挨拶の後、ラジオ体操で入念な準備体操をし、職員の指導の下、10名毎のグループに分かれ各自の体力に合わせ、一本一本丁寧な作業に取り組みました。

会員の人たちは、これまでも富士山をはじめ、多くの地域で森林ボランティアを実施し、経験豊富で作業も手慣れており、中には背丈以上にある枝まで器用に落としていました。

午後も引き続き作業を行い、全部で約2,000本程度の枝落としが出来ました。

作業を終えて、きれいで明るい森林になり、森林ボランティアによる森林整備はこれからの国有林野事業に大きなパワーになると再認識しました。(前業務第一課長 寺田英司)



生き生きとして作業に取り組む参加者

森林官からのおたより

茨城森林管理署 久米森林事務所

森林官 飯塚 三千代

久米ってこんなところ

私の勤務する久米森林事務所は、茨城県中北部の常陸太田市及び常陸大宮市にまたがる区域を管理しています。スーパーなどで見かけた方もいるかもしれない『くめ納豆』の本社が森林事務所すぐそばにあります。その「久米」です。

また近くには水戸黄門で有名な徳川光圀公が隠居した西山荘や光圀公のお墓があることでも知られていま



竜神平からの眺め

す。

管内の国有林はスギ・ヒノキ人工林を中心に1,300haほどで、小さな団地に分散しています。

事務所から車で5分のところにある久米国有林の頂は竜神平と呼ばれていて、デジタルテレビアンテナ敷として貸付しているのですが、そこから見下ろす景色は一面の田んぼです(写真)。

このように米所としても適した土地柄からか、かつては山間の谷間まで田んぼとして利用されていたようで、民有地が沢に沿って深くまで入り組んでいます。そのため、管内の境界標は約15,000点、延長269キロメートルと多く長いのが特徴で、地域との関わりも重要です。

この手強い境界を見廻るにはベテラン職員の協力が不可欠です。

当森林事務所の現場職員は臨時職員の1名のみですが、隣接森林事務所との職員2名が併記発令となっているため、そちらの森林官と共に協力してもらい、業務にあたっています。さすがにベテラン、身軽でタフな姿は頼もしい限りです。そしてここ

で欠かせないのがコンパスグラスです。ハンディタイプで軽く、のぞき込めるので、持ち運びに適しており視準も正確なので、不ポイント探しに重宝しています。

森林官の仕事を通して思うこと

森林官になって2年8ヶ月が過ぎました。1年目は目の業務をこなすだけで精一杯でしたが、少しずつ余裕が出てきた2年目を以て、身近な題材をもとに調査・発表することに取り組んでいます。

昨年はスギ林を皆伐した後の谷底にケヤキを植え、水辺林再生に取り組んでいる箇所の継続調査を行いました(写真・ケヤキ水辺林)。ここが将来どうなっていくのか楽しみ！。こうした事例は多くないので、調査



ケヤキ水辺林

を継続し、その成果を今後に生かしていくことが必要です。

今年には人工林の「つる被害」に着目し、その実態を調査し、先日森林技術センターで行われた「森林・林業公開講座」において発表しました(写真)。公開講座での聴講者は一般の方も多く、業務とは異なる目線の意見を聞けるため、自分にとっても刺激を受け勉強になりました。

森林官となって日々の業務を進めていく中では、答えが見出せない問題や、どうにもならない問題にぶつかります。それでもあきらめずに、将来に渡っていい森林を残すにはどうしたらいいのか。その答えを探しながら、自分に出来ることを少しずつ見つけて実践しながら、これからのいい森林づくりに精進していきます。



「つるの被害」についての発表

私の視点

今日自然保護は皆の共通責務

岩船地方山岳遭難対策協議会 副会長 横山 征平

私の住んでいる新潟県・関川村は、約3000平方メートルの内88%を山地が占めており、いわゆる現代風にいえば自然に恵まれた土地です。

山登りが趣味で、方々の山を歩きまわるのですが、自然保護の定義は難しい。古くは「山に生かされた」という言葉があるほど、人々は自然から直接恩恵を受けながら生活を維持してきました。

かつては田舎ほど生活が豊かでありましたが、文化の進展により自然に対する概念が変わり、現代では田舎ほど衰退が加速する時代となりました。自然を活用しながら生活を維持した時代、資源を産業として、または、産物を採取し活用した時代、そして、現代は癒しの場とかわり、一昔前とは変った目的で入山する人が多くなりました。

「山の中を歩けば踏み跡ができる。動物が歩いた跡は獣道となり、人間が歩くと登山道となる。最初は植物が生えているところにできた踏み跡が、多くの人間が繰り返し歩くことで、しだいに土壌が掘り返され雨や雪などの降水の浸食により深く掘れ

て。それとともに草や木も失われていく。」

(ある山岳雑誌の登山道荒廃プロセスから)

登山道の荒廃が入山する人間が原因であり、すでに自然回復や荒廃防止活動に努力している団体や個人もいますが、まだ一部にすぎません。入山する人それぞれが自然保護の重要性を認識しなければならぬ時代になっていきます。自然界は昔と変わらない厳しさを



大石川上流ブナ林の晩秋



山岳遭難救助訓練風景

もつています。

新潟県岩船郡は平成20年の町村合併により、現在は村上市・関川村・粟島浦村ですが、合併しても従来の山岳、山地に囲まれた地域環境には変わりありません。

そんなことから昔から山仕事による事故、現在では山菜取り、登山者の事故が発生しています。

これに対応するため、この地区では昭和34年(1959年)に岩船地方山岳遭難対策協議会を発足させました。構成団体は所轄警察署・岩船地域広域消防本部・下越森林管理署村上支署・管内山岳団体・管内市町村で、遭難事故防止の啓発、遭



執筆者：大平国有林三角点にて

なったりすると、山は気軽に入れるものだと錯覚し易いものです。しかし、山そのものは昔とかわりない厳しい場であることを自覚し、事故のない自然活用を目指してほしいものです。

難事故発生ときは、迅速な捜索、救助対策を講ずることを目的としています。目的達成のため、事故防止の啓発活動もさることながら、現地訓練を積み重ねています。発足当時の実技指導は山岳団体に委ねるところが多かったのですが、現在では広域消防本部員が日夜訓練を積み、今では指導的な存在であり、地域の期待は大きなものとなっています。

一方、遭難者の入山目的の多くは、山仕事でも、登山者でもなく山菜採取、または溪流釣り目的とした入山者に多く発生しています。これらの方々も単なる遊山ではなく、危険な場所に踏み込むのだと自覚し、ある程度の技術や知識を身に付けていたいただきたいものです。とかく、山奥まで道路が整備されたり、装備が良くな

平成20年度 森林計画等検討会を開催

国有林森林計画等検討会は、国有林森林計画の樹立等に際して、学識経験者で構成される委員の方々から意見をいただくために毎年開催しているものです。

本年度は5つの森林計画の樹立と6つの変更等について、八溝多賀森林計画区（茨城森林管理署管内）における現地視察を含め、2日間の日程で検討をしていただきました。

現地視察（11月25日）

1000年先を見据えた森林づくりの一環として高齢級間伐や針広混交林化の推進が重要な課題となっていることを踏まえ、茨城森林管理署長の説明のもと、次の3つの施業箇所



現地視察の様子



検討会の様子

で意見交換を行いました。

①高齢級間伐

間伐実施後の樹冠（クローネ・枝葉の茂った部分）の配置を充分に考慮した選木・伐採率とする必要性、既に進入している広葉樹の育成について

②帯状複層伐

将来の伐出の効率性や下層木の生育条件も考慮した伐採する帯（群）の幅及び残し幅について

③列状間伐

樹冠の成長や残存木の生育を考慮した伐採列の幅及び残し幅について

検討会（11月26日）

森林計画のほか、前日の現地視察を踏まえ、地域管理経営計画の一部をなす「森林の管理経営の指針」の見直しについてもご意見をいただく機会を設けました。また、

- ① 一般の人たちにわかりやすく伝える工夫が必要ではないか
- ② 地球温暖化防止対策とその効果の把握が必要ではないか
- ③ 野生動物の保全や被害防止の観点からの計画も加味してほしい

といったご意見や、今後の国有林が取り組んでいくべき課題や姿勢についてもご助言をいただいた後、森林計画（案）へのご了承をいただきました。

開かれた「国民の森林」としての管理経営を一層推進していくためにも、本検討会で得られた貴重なご意見を真摯に受け止め、森林計画等の樹立・策定を進めていくこととして（計画課）

上野動物園で 国有林の取組をPR



国有林の取組を紹介したパネル



PRの様子「上野動物園」展示館

11月1日（土）から一ヶ月間、上野動物園において同動物園が主催する、絶滅危惧種アカガシラカラスバトの特別展「あかぼっぽ祭」が開催されました。

これは、2008年1月に小笠原村父島において、小笠原諸島に生息するアカガシラカラスバトに関する国際ワークショップが開催され、ここで決定された飼育、繁殖及び普及啓発等についての活動方針に基づいて実施されたものです。

関東森林管理局では、アカガシラカラスバトの保護のため、保護管理対策調査等を実施しており、同特別展を後援して、小笠原諸島森林生態系保護地域における国有林の取組、父島東平のアカガシラカラスバトサンクチュアリーにおける保護活動及び外来植物の駆除について、写真パネルで紹介しました。（指導普及課）

「関東森林管理局 国有林野等所在市町村長 有志連絡協議会」を開催

関東森林管理局では、開かれた国民の森林の実現に向け、国有林野等の所在する地域の市町村長との意見・情報交換を通じて、国有林野等の適切な管理経営に資することを目的とした会議を毎年度開催しています。

本年度は12月2日(火)に局大会議室において、また、12月3日(水)には東京都においてそれぞれ開催しました。

各会場では、市町村長、局の出席者

一枚の写真



8.27 白河市内の集中豪雨による災害

この写真は、平成10年8月26日から27日にかけて福島県南部と栃木県北部を中心に降り続いた集中豪雨(西郷村では降雨量が1,012ミリ)となり年間降雨量の60%)によって被害を受けた白河市の状況です。

この集中豪雨により土砂崩れや河川氾濫が相次ぎ、西郷村の福祉施設「太陽の国からまつ荘」が土砂に巻き込まれ入居者5人が死亡するなど、住宅の損壊・浸水、道路の決壊・橋の流出、農耕地の冠水等未曾有の大被害が発生しました。

福島森林管理署白河支署管内においても、林道決壊及び林地崩壊

等の被害が多数発生したことから、災害復旧に全力を傾注した結果、平成15年に林道施設や林地復旧等について重要な箇所についての復旧は完了しました。

大被害をもたらしたこの災害から今年で10年が経過し、福島県及び関係市町村ではこの災害の教訓を風化させないため、豪雨災害応急対策の訓練実施、豪雨災害体験者による発表会、災害当時の写真の展示会を開催するなど住民の防災意識の高揚を図りました。

また、福祉施設「太陽の国からまつ荘」でも、災害の次の年から毎年、10年前とほぼ同じ規模の集中



局で実施した会議

に加え林野庁幹部、森林管理署長等も出席し、昨今の森林・林業行政等に関する情報提供と意見交換が行われました。

会議の冒頭、小林局長から、「関東

会議の冒頭、小林局長から、「関東



東京での会議

局11.9万畝の国有林は、市町村など地域の協力なしでは業務を実施できない。日頃のご協力を感謝するとともに、市町村・国有林が協力し地域の振興、活性化に向け対応していければと考えており、国有林に対し率直なご意見・

叱責等頂きたい。」旨の挨拶がありました。

引続き林野庁から21年度林野庁予算要求の概要や地球温暖化防止森林吸収源対策の現状、国有林野の改革等について説明があり、次いで企画調整室長から関東森林管理局の取組みについて紹介の後、意見交換が行われました。

両会場とも、出席いただいた各市町村長から、局への要望や林政への提言等、近年の山村、森林・林業を巡る状況を踏まえた貴重なご意見をいただき、有意義な会議となりました。

今後ともこうした機会を通じて関係市町村との密接な関係を築き、国有林野の適切な管理経営等に役立てていきたいと考えています。(企画調整室)

豪雨に見舞われたとの想定で大掛かりな防災訓練を続け、万が一の事態に備えているそうです。

最近も、新潟県や岩手県における大地震やゲリラ的集中豪雨の発生など災害が多発しており、改めて災害に対する備えを万全にしたいなど、あの日の教訓を生かしたいものです。

(白河支署 広報連絡官 阿久津文彦)

発行所 関東森林管理局
編集 総務課
TEL(027)2110-1158
FAX(027)2110-1159

